

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520051
 研究課題名（和文）『シュローカ・ヴァールティッカ』綱要書に基づくインド祭事哲学体系の研究
 研究課題名（英文）A Study of the Philosophy of the Pūrva Mīmāṃsā: An Interpretation of Its Elementary Treatise
 研究代表者
 本田 義央 (YOSHICHIKA HONDA)
 広島大学・大学院文学研究科・助教
 研究者番号：80253037

研究成果の概要（和文）：ミーマーンサー学派バーツタ派の哲学体系の全容を、これまでほとんど取り上げられることのなかった『シュローカヴァールティッカ』綱要書の読解を通じて、提示することが本研究の目的であった。本研究の成果として『シュローカヴァールティッカ』『ニーティタットヴァーヴィルバーヴァ』との対応関係を出来る限り示した『マーナメーヨーダヤ』の日本語訳が完成した。同書の日本語訳は本邦初であり、インド哲学諸派の研究にも資するところ大である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to portray the philosophical system of Bhāṭṭa School of the Pūrva Mīmāṃsā, through an interpretation of an elementary treatise of the *Ślokavārttika*, which has been paid little attention. As such, it presents the first Japanese translation of the *Mānameyodaya*, with annotations that show the correspondences of the text to the *Ślokavārttika* and to the *Nīitattvāvirbhāva*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：ミーマーンサー、六派哲学、存在論、認識論

1. 研究開始当初の背景

『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』は、インド思想史上、認識論・論理学分野において仏教哲学者ダルマキールティ（七世紀頃）の『プラマーナ・ヴァールティッカ』と並ぶ一大論書である。近年、大前太、吉水清孝、片岡啓の各氏により、その諸注釈を含めて批判的校訂作業とその内容読解が精力的に進められていることはよく知られている。この分野において我が国の研究水準は世界のトップレベルにあると過言で

はないであろう。

しかしながら、不思議なことに『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』に対する注釈書ではなく「綱要書」が後代のミーマーンサー学徒によって作成されている事実は、まったくといってよいほど見過ごされている。たとえば、最新の Taber の知覚章研究においても、「綱要書」への言及はまったくない。ここで思いおこしたいのは、故梶山雄一博士による仏教学僧モークシャカラ・グプタ（十一～十二世紀頃）の『タルカ・

パーシャー』(邦題『認識と論理』)の研究である。ダルマキールティの認識論、論理学、弁証論を平易で組織的に解説した同書を機縁として、仏教認識論・論理学の研究が深化発展したことは誰もがみとめるところであろう。本研究がとりあげる『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』綱要書である『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』及び『マーナ・メーヨーダヤ』は、仏教認識論・論理学研究において『タルカ・パーシャー』が果たした役割を担うるテキストである。

『ニーティ・タットヴァー・アーヴィルバーヴァ』は十三世紀にケーララで活躍したチダーナダによって著わされた。同書は、ミーマーンサー学派の教義を「学習儀軌論」から「ヴェーダ聖典非人為論」までの四十四の論題にわたって解説する。思想的立場はクマーリラ・バッタ派(バクタ派)であり、ミーマーンサー学派の教義の正確な意味を明らかにするために、ミーマーンサー学派の二十三の「ニーティ」(「公理」)を詳細に議論している。そこにはクマーリラ・バッタの『シュローカ・ヴァールティッカ』における諸テーマが仔細漏らされることなく取り上げられている。一方、『マーナ・メーヨーダヤ』は、十六世紀から十七世紀にかけて、ナーラーヤナ・バッタとナーラーヤナ・パンディタという二人のナーラーヤナによって著された。同書は、『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の論述を認識論と存在論の観点から二部構成で再構築した縮約版であり、ラーマスワミ・シャーストリーがいうように、その簡潔さと明快さがバクタ派綱要書として貴重である。同書のこのような成り立ちと性格のゆえに同書の翻訳研究を『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』研究とあわせて行うことが合理的である。

研究代表者はインド言語哲学およびインド修辭学の研究に従事してきた。インド言語哲学は当然ミーマーンサー学派と深くかわりを持ち、一方のインド修辭学も、美文詩を主とする文学作品を分析する学問であり、それはサンスクリット文法学のみならずヴェーダ解釈学としてのミーマーンサー学の成果に強く依存している。研究代表者はこれまでに修辭学書にみられる言語理論へのクマーリラ・バッタの影響について等の研究を公表してきた。しかしそれらの研究の過程で、上述のようにミーマーンサー学派の全体像をとらえるために有効かつ重要な綱要書の研究がほとんどなされていないことにきづいた。我国におけるインド正統哲学派の綱要書研究として、例えばニャーヤ・ヴァイシエーシカ学派に関しては松尾義海『タルカ・パーシャー』(『インド論理学の構造』)等があるが、ミーマーンサー学派に関しては、その

祭式儀軌解釈理論について北川秀則『アルタ・サングラハ』があるものの、認識論・論理学・存在論に関する綱要書は未だ誰によっても取り上げられていない。ミーマーンサー学派バクタ派の認識論・論理学・存在論に関しては、その概要を知ろうとする時、従来 Govardhan P. Bhatt の名著 *Epistemology of the Bhāṭṭa School of Pūrva Mīmāṃsā* (The Chowkhamba Sanskrit Studies, vol. 17) と『マーナ・メーヨーダヤ』の英訳によるしかなかった。このような状況の下で、研究代表者は、パーニニ文法学研究とミーマーンサー学派研究を研究の二本柱としてきた小川を研究分担者とする本研究計画の立案に至った。インド哲学研究においてミーマーンサー学派研究の重要性が認識され、同派と関連する他学派の研究の進展をみている今、ミーマーンサー学徒自身による『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』の包括的論点説明を通じ、インド哲学研究の新局面を切り開くことを本研究はめざす

2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は次の通りである。

(1) 『マーナ・メーヨーダヤ』和訳研究

『マーナ・メーヨーダヤ』は C. Kunhan Raja と S.S. Suryanarayana Sastri による校訂テキストと英訳があるが、和訳研究は本研究が初めてである。「1. 研究の背景」で述べた通り、簡潔さと明快さをともなった同書は、ミーマーンサー学派の全体像をとらえようとするとき、絶好のテキストである。

(2) 『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の批判的校訂テキストの作成

『マーナ・メーヨーダヤ』は『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の縮約版である。したがって、そのもととなった『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の研究を並行しておこなう。

『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の刊本は、1953年に P.K. Narayana Pillai により *Anantaśayanasamskr̥tagranthāvali* 168 として 1953年に刊行されている。しかし、この刊本は、テキスト刊行にあたって限られた写本のみを利用して校訂されたものであり、不十分である。したがって、本研究では、現存する写本すべてにもとづいた批判的校訂作業を通じてテキストを確定する。

ところで、『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の綱要書としての性格上、その記述は的を絞った簡潔なものとなっている。したがって、同書に対する注釈書を活用することが求められる。『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』には未公刊の三種類の注釈が存在するが、本研究においては、パラメーシュヴァラ二世による『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ・ヴィアーキヤ』を

利用する。本研究でパラメーシュヴァラ二世の注釈をとりあげるのは、彼がマンダナミシュラの『スポータ・シッディ』と『ヴィブラマ・ヴィヴェーカ』、またヴァーチャスパティ・ミシュラの『タットヴァ・ビンドウ』に注釈を著しており、その注釈家としての地位が確立されていることによる。またこれらの注釈の一部がすでに刊本として出版されていることも『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ・ヴィアーキヤー』写本を利用する際に利便だからである。

3. 研究の方法

(1) 写本収集：『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』の再校訂作業のために、同書および『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ・ヴィアーキヤー』写本をインドにおいて調査収集する。『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』には十本の写本が、『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ・ヴィアーキヤー』には五本の写本が、それぞれ写本カタログにより確認される。それらは、ラホールのパンジャブ大学所蔵の『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』写本一本をのぞき、南インドのタミル・ナドゥ州とケララ州の大学・研究所・図書館に所蔵されている。写本は可能な限りデジタルカメラにより撮影しコンピュータ上で画像処理を行えるようにする。これらの写本はほとんどがマラヤラム文字写本であるため、研究代表者・分担者がマラヤラム写本の読解を遂行することはいうまでもないが、一般に行われているように、より効率的な写本処理のためには、現地の研究所員・図書館員によるデーヴァナーガリ文字への転写を確保することが有効である。

(2) 原典読解：本年度は初年度であるため、写本を前提とする研究は計画しない。研究代表者は、『マーナ・メーヨーダヤ』において認識手段について論じられる前半部分（マーナ部）の和訳研究を行う。研究分担者小川は『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』を現行のPillai校訂本にもとづいて素読し、そのテキスト上の問題点を明らかにすることにつとめる。研究代表者と研究分担者は、定期的に検討会をもち、それぞれの原典読解の際に見いだされた問題点を検討する。その際には『シュローカ・ヴァールティッカ』教令章の研究をおこなっている石村克氏（広島大学大学院文学研究科博士後期課程）に研究協力者として参加を請う。『マーナ・メーヨーダヤ』『ニーティ・タットヴァーヴィルバーヴァ』は、ミーマーンサー学派バーツタ派の認識論・論理学の綱要書である。したがっ

て、ミーマーンサー学派の祭事哲学の検討の面で、最新のヴェーダ学の成果を考慮することが必要であり、またクマーリラ・バツタの思想形成の上できわめて重要な論戦相手であったダルマキールティをはじめとする仏教認識論・論理学派の研究成果も考慮することが必要である。そしてまた、同じミーマーンサー学派内のバーツタ派と並ぶ一大学派を形成したグル派の思想の研究についても当然考慮することになる。

(3) 関連文献データベース作成：近年インド哲学・仏教学の分野では、研究に不可欠の道具として、関連文献のテキストデータベースが急速に整いつつある。仏教認識論・論理学の分野ではすでに主要な文献はほぼデータ化され、それらがなければなしえなかった大きな成果があげられている。しかし、ミーマーンサー学派研究に関しては、その研究者の少なさを反映して、いまだクマーリラ・バツタとプラバーカラ派の主要著作のデータベースさえ整っていないのが現状である。したがって、現行の刊本はその多くが再校訂の必要を指摘されているとはいえ、現行の刊本にもとづくそれらのデータベース化が本研究には必須である。本研究においては、クマーリラ・バツタの『シュローカ・ヴァールティッカ』とならぶ大著『タントラ・ヴァールティッカ』のデータベース化を中心に作業する。

4. 研究成果

本研究の成果として、『マーナ・メーヨーダヤ』の日本語訳を暫定的な形ではあっても完成させたことが第一である。本日本語訳は、適宜修正を加えたうえで、将来刊行予定である。『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』綱要書の研究は皆無といってもよかった。『ミーマーンサー・シュローカ・ヴァールティッカ』の諸論点を綱要書を通じて明確に提示する本研究の成果には、すでに述べたように梶山博士の『タルカバーシャー』と同様、ミーマーンサー学派バーツタ派の哲学体系に関するリファレンスの役割が期待される。本研究により、同派の哲学体系の大綱を問題の所在とそれに対する同派の回答という形で知ることができることとなり、今後はミーマーンサー学派における個別テーマ研究を全体的パースペクティブから深化発展させることが可能となる。さらに、他の哲学諸派の研究の際にも従来全容を知ることが難しかったミーマーンサー学派の哲学体系の綱要として極めて有用な研究となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. 本田義央「ナーラーヤナ・パンディタについて」『比較論理学研究』第 6 号, 41 頁～44 頁, 2009 年, 査読有

[学会発表] (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本田 義央 (HONDA YOSHICHIKA)
広島大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号 : 80253037

(2) 研究分担者

小川 英世 (OGAWA HIDYO)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号 : 00169195

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

石村 克 (ISHIMURA SUGURU)
広島大学・大学院文学研究科・博士後期